

質的データを用いたソーシャルワーク研究に 関する一考察

—事例研究法に焦点をあてて—

林 眞 帆

【要 旨】

本稿では、質的研究の特性と課題を整理することを通じて、質的研究の意味を再検討した。なかでも、「価値」と「実践」と「理論」を結ぶ事例研究法を取り上げ、ソーシャルワーク研究における意義について論究した。

【キーワード】

質的研究 事例研究法 実践の科学化

1. 問題意識と研究目的

ソーシャルワークは、「人びとが社会的機能を効果的な水準まで達成するのを助け、すべての人びとの福祉を高めるために社会変革をもたらす応用科学である」(Barker1999:455)といわれる。これは、ソーシャルワークがその使命を果たすために、「ひととは何か」「社会とは何か」を深く読み解くために学問領域を超えた多様な知見を必要とすることを意味する。しかしながら、ソーシャルワークは、現実の生活問題を対象とすることから、日々変わりゆく人びとの暮らしの中で起きる社会事象に目を向け、生きる場で展開される実践をとおして「ひとや社会」を今ひとたび探索することを必要とする。これが実践学と言われる所以であり、ソーシャルワーク研究が実践の科学化をめざす意味をもつ。

この観点から本邦においても、EBP (Evidence Based Practice) との関連などから研究方法のあり方についての議論は枚挙に暇がない⁽¹⁾。とりわけ、「複雑な世界が意味するものを全体論的に探究する方法である質的研究」(Royse2001:261)への関心は高く、近年、多くの学問領域で質的研究が再評価されたこともあり、ソーシャルワーク研究において多様な調査や分析方法が用いられるようになった(Flick=2003; Denzinら=2008)。なかでも、普遍性や客観性を重視してきた保健医療学研究においても当事者研究やケア研究に質的研究が採用されることが多くなっている(松原 2011:23)。しかし、いまだ質的研究は、主観的解釈の信頼性や妥当性について揺れ動いていることも事実である。さらに、質的研究そのものの議論のまえに、研究プロセスの記述不足や方法論の特性を十分に活かしきれない報告など、研究する側への批判的な指摘がある(瀬島2005; 三毛2009)。

そこで、本稿では、質的研究の特性と課題を整理し、質的研究の意味を再検討する。なかでも、質的研究の初めの一步となる事例研究を取り上げ、理論と実践を結ぶソーシャルワークにおける質的研究のあり方について論究する。

2. 質的研究とは何か

2 - 1. 質的研究の歴史的背景

質的研究は、心理学、社会学、文化人類学、社会福祉学、医学など多様な分野で注目を浴び、多種多様な方法が用いられている。また、これらの理論的視点は、さまざまに異なる学問領域と研究アプローチに依拠している。そのため、質的研究の理論と方法は一枚岩ではなく、異なるアプローチが混在する（広瀬ら2010：45）。そして、さまざまに異なった理論的立場で質的研究が規定され、複数の解釈的アプローチが試みられるため、質的研究を定義づけするのは難しい（Denzinら=2006）といわれている。ただし、テキストを実証的データとして用いるという点や研究者自身と研究対象となる人々の現実の構築を扱うという共通点がある（Flick=2003：17）。また、DenzinとLincoln（=2008：9）は、歴史的世界の変化や新たな知的立場（思想や理論）の登場などの影響を受け、時代や人によってその捉え方が異なるとしつつも、質的研究は、観察者を世界のなかに位置づける状況的な活動であり、世界を可視化する解釈的で自然構成的な一連の実践からなると要約している。

以上のことから、質的研究とは、研究領域や対象によってそれぞれの思想的・理論的立場があり、そこから人びとの生の営みの複雑な世界が意味するものを理論とテキストを往還させながら探究し、解釈していく活動と整理できる。

他方、質的研究のアプローチは、主観的な視点に着目するものや、相互行為の形成とプロセスに焦点化されるもの、語りや行為の意味を探るものなど多様である。Flick（=2003）は、このように異なったアプローチが混在するのは、質的研究が多様な道筋（歴史）をたどって発展してきたからだと述べている。例えば、社会学は、元来、ライフヒストリーや事例研究などを通して現実やその世界を認識することに力を注いできたが、実証科学のパラダイムを受けて社会現象を数値化し、客観的な記述を追い求めることになった。しかし、1960年代以降は、数量化志向の社会調査への批判やポストモダニズムの影響を大きく受け、質的研究の妥当性と研究結果の一般可能性への追求から、多様な解釈の方法を生み出すことになった。また、心理学は、そもそも質的研究からはじまりピアジェの認知心理学のように人間の理解に大きな影響力をもつ理論を生み出している。やまだは、「のちに、一層の科学化をめざし、自然科学を手本に『心』という概念を捨てて外から観察される行動のみを扱う『行動主義』に極められたが、1990年代ごろになるとナラティブ・ターン（物語的転回）を経て、多様性や多声性を重視する質的方法論の変革が試みられてきた」と心理学における質的研究の変遷について説明している（2008：9）。

ソーシャルワーク研究の歴史⁽²⁾は、Richmondの『社会診断』に見られるように、その発展過程において個々の事例を重視し、科学的学問としての体系化を図ってきた（佐藤2002：35）。また、Robinson（1969：102）は、人間は自分だけが自己の経験の本当の意味を明らかにすることができるのであるから、クライアント自身によって語られる生活史が最も重要な根拠となりうるとし、利用者の語りという質的データに実践の根拠を見いだしている。しかし、ソーシャルワーク界においても近代科学の拠り所となった実証性と客観性を追求する傾向が強まり、経験主義的なアプローチに依拠した効果測定による実証性の研究が進展している。ただし、一方ではポストモダニズム以降、研究者や実践者の起点もクライアントの言葉や相互関係からとらえ直すことが要求されるようになった（木原2002）。

このような学問研究における質的研究の復活は、時代の要請であるといってもいい（Flick=2003：18）。また、質的アプローチへの関心が高まった背景には、「従来の量的データを用いる仮説検証型の研究ではとりこぼしてしまう多様で複雑な現実世界を描く必要があるとい

う共有された認識」(広瀬ら2010)がある。つまり、近代科学は、社会思想の影響を受け、人間中心主義への回帰とともに科学のしかたを問われることになったといえる。言い換えれば、ナラティブやコミュニケーションへの関心、特殊で具体的な問題の重視、地域的文脈との関連、時間的歴史的な文脈を思考する質的研究法の意義をあらためて社会に問うことになったのである。

2 - 2. 質的研究の特徴と課題

質的研究は、主観的意味とそれをもたらす客観的現実の存在を問うことを強調する(Royse2001:261)。そして、調査の目的は既成の理論の検証ではなく、現象の新たな側面を発見したり、実証的データに基づいて新たな理論を生み出すことにある(Flick=2003:9)。つまり、仮説を予め立ててそれを検証するのではなく、質的データから解釈したものをもとに理論(仮説)を構築していく方法である。そのため、質的研究は、諸個人の生活における日常的ないしは問題場面や意味を示す多様な経験的資料を分析する。主に扱われるデータは、インタビュー法によって収集される口頭や文章によって示されたデータと、参与観察や映像的方法などの視覚データなどがある。口頭データには、個人の生涯を社会的文脈において詳細に記録した口述史や、個人の人生の語りの記録と他の資料によるデータを補足するライフヒストリー、ある個人の自らの人生についての断片的な記録を示すライフストーリーなどがある(佐藤2002)。特に、口頭データは、人間にとって出来事の意味や時間的、社会的な文脈をもつととらえられており、リアリティの観点から主要な分析対象となっている。野口(1995)や木原(2002)は、コトバに潜む「現実」は自明のここのように予めそこにあるのではなく、社会的に構成されるという社会構成主義の立場からナラティブを重視する。とりわけ、ナラティブを重視する実践や研究では、人は現実について常に意味づけしながら生きているという前提に立ち、過去から現在に至る一連の経験を解釈しようと試みるものである。また、自分の言葉で語れない人びとが、社会に向けて自分たちの言葉で自分たちの要求を語ることを通じて、個人の問題解決と社会変革に同時に取り組むことを指向するものである。このような社会構成主義の思想は、質的研究の支柱として、ソーシャルワーク研究にも大きな影響をあたえている(松岡2006)。

しかし、質的研究は、量的研究と対比され、非科学的、予備的調査的、主観的であると批判されることがあり(Denzinら=2008:8)、信頼性と妥当性において疑問視されることが多い。それは、質的研究においてデータの分析が研究者(調査者)の解釈に拠っていることにあり、データ収集から解釈まで研究者に生じる行為や感情などもデータの一部として含まれる点にある。しかしながら、研究手法の異なる量的研究と質的研究では、信頼性や妥当性の評価基準が同じというわけにはいかないだろう。つまり、それぞれの手法がもつ信頼性と妥当性についての意味を検討する必要がある。

和気(2010:93)によると量的研究における信頼性とは、「尺度の安定性や精度の高さ」のことであり、測定者が異なっても幾度測定しても同じ結果が得られる安定性をともなうものであるという。一方、妥当性とは、「尺度が意図する概念を正確に反映して測定しているかどうかを問うもの」であるとされる。これに対して、質的研究における妥当性とは、説明が記述に適合しているかどうかを問うこと、信頼性とは、結果ではなく、データ収集や分析のプロセスに置く(Flick =2003)。また、厳密性とは、特定の手法に忠実であるということではなく、いかに分厚い記述⁽³⁾を保証するかに注意を払うことだと捉えている(Flick=2003;Denzin=2008)。

一般的に質的研究は、データ記録の形式化や解釈手続きの共通性、調査者のデータ収集のスキルなどデータの「質」を支える方法によって信頼性を高める。また、合理的なデザインとプロセスの精緻化を図ることで妥当性や厳密性の確保に努めている。とりわけ、信頼性の確保について

は、複数の研究者が共同でおこなうことや、データの収集方法と分析、考察のしかたについて第三者に評価させるべきとの主張がある。実際に、異なる手法や異なる調査者による調査や結果を利用して、研究の確からしさを高めようとするトライアングレーションの活用などの工夫もみられる。しかし、研究に直接的に関わりがない、または一部分にしか参加していない第三者が正当に評価することは難しいとの意見もある（藤井2004）。

瀬島（2005：356）は、ひとりの語りを解釈する研究などにおいては、「分析の個別性や特異性が尊重される分だけ、分析の妥当性を読者に明示しなければならない。つまり、『対象者としての他者を語る』と同時に、研究者がその洞察にたどりついた過程を『自分の語るもの』として記述しなければならない」という。また、佐藤（2008：27）は、質的研究をおこなうものは、「個別具体的な意味の世界と抽象的な意味世界との間の往復運動が繰り返されたときに初めて、『現場の言葉』を『理論の言葉（学問の言葉）』へと移し替えられた『分厚い記述』が可能になる」と述べている。つまり、質的研究では、研究デザインの正当性やプロセスを主張できるような説明可能性を高めていくことが重要といえる。言うなれば、質的研究は研究者の個人的な意味世界が深くかかわってくることから、調査対象者の意味世界と学問とを媒介する研究者の倫理的で丁寧な作業が評価を左右するといっても過言ではないだろう。

2 - 3. 質的研究の可能性

質的研究は、量的研究と比較されその科学性を批判されることがある。しかし、質的研究と量的研究は対立概念ではない（Royse2006；瀬島2005；Marlow2006）。量的研究は、理論やモデルを実証する点で有効であるし、質的研究は、多様なパラダイムとアプローチによって、深い分析や文脈の詳細を知ることにも強みをもつ。加えて、質的研究の研究成果を量的研究によって、より説明力の高い確実な研究成果を得ることもできる。Marlow（2011）は、実証主義による量的研究と解釈主義による質的研究の異なる性質の研究において、価値、仕組み、経験、影響力、科学的知識などは異なるが、いずれもジェネラリスト・ソーシャルワークにおいては重要な調査研究となると述べている。

このような観点から、質的研究の妥当性や信頼性を高めるいくつかの試みがある。まず、一つ目は、コンピュータを質的研究に活用しようとする動きである。近年、質的研究においてデータ分析の支援を目的としたQDAソフト（Qualitative Data Analysis）と呼ばれるツールが増えてきている（佐藤2008；稲葉ら2011）。その特徴は、テキストデータの解析により、コード化・カテゴリー化をおこない、そこから重要な概念を抽出する作業をコンピュータで実施するものである。端的に言えばQDAソフトは、紙媒体による質的データの手順をほぼ忠実に再現する。Weitzman（=2008：195 - 197）は、ソフトウェアを使った質的データ分析に期待できることとして、consistency（整合性）、speed（速さ）、representation（表現）、consolidation（統合性）の4点を挙げている。また、テキストデータの集合から何らかの意味のある情報を取り出す過程を支援し、新しい知識を見いだそうとするテキストマイニング（text mining）などの分析手法も普及しつつある（稲葉2011：257）。このような動向は、質的研究の「質」を高めていこうとする試みであり、それはいかに実践に寄与できるのかという本質的な課題への挑戦といえよう。

二つ目は、実用主義と構成主義という二つの異なるパラダイム論争を和解させるミックス法（Mixed Methods）と呼ばれる調査方法である。それは、量的研究のレビューの結果と質的研究のレビューの結果による統合や組み合わせによって、エビデンスのより包括的で詳細な見方を得ようとするものである（Popeら=2009；池埜聡2010）。

池埜（2010：145）は、その特徴を①質的・量的双方の強みを活かし、弱みを補うことができる、②質的・量的いずれか一方の方法では答えられないリサーチ・クエッションに対応できる、③質的・量的調査のパラダイムの違いを容認し、リサーチ・クエッションの目的を達成することに最大の価値を置いた新たなパラダイムに根ざす、④帰納あるいは演繹いずれかの目的に限定されないことがないため、汎用性が高いと整理している。ただし、コンピュータでは調査対象者の意図を保証できるのかという問いや、妥当性に関する検証枠組みの設定の必要性などの議論があることも否めない。しかしながら、質的研究の精緻化に取り組むことは、人びとの隠された現実の諸相を引きだし、クライアントの存在と支援のあり方をより明示できる可能性をもつ。それは、マクロとミクロの双方から人びとの暮らしを支える実践に寄与することになろう。ここにソーシャルワーク研究における質的研究の意義があるといえる。

3. ソーシャルワーク研究における事例研究法

3 - 1. 事例研究の特性

事例研究は、個別の事例に詳細な報告と考察を指す質的研究の一つの方法（Flick=2003：398）である。また、岩間は、社会福祉実践における極めて重要な事例への接近法であると述べ、実践と研究の事例研究を区別し対人援助の事例研究について「ケースカンファレンスによって、当事者本人の理解を深め、そこを起点として対人援助の視座から今後の援助の方針を導き出す力動的な過程」（2007：736）と定義している。しかし、三毛（2009：76）は、「ソーシャルワーク実践における事例研究という用語は、論者によって多様な意味で用いられ、事例検討やケース研究など類似の用語も多い」と述べている。例えば、下山（2001：65）は、事例報告、事例検討、事例研究については概念的に厳密な区分はあまりされてこなかったことを指摘する。そこで、事例研究の特性に焦点をあて、整理をしたい。

事例研究は、ソーシャルワーク実践の多くの枠組みに適合する。例えば、対応困難とみなされた事象や、意味を説明できないと無視されやすい事象に対しても取り組むことができ、アセスメントや介入、評価のために必要なソーシャルワークの知識を構築する大きな可能性をもっている（Gilgun1994：371）。また、事例研究は単一事例に強く、多様な個別の単位を調査することができる。言うまでもなく、事例研究は、問題発生過程や出来事の深い意味について文脈のなかで理解するところに有用性があり、ある単位の相互作用をあらわす文脈は、研究調査の重要部分になる（Gilgun1994；Royse 2001）。また、AlexanderとBennett（=2013：27）は、事例研究の長所について、①高い概念妥当性を実現する潜在的能力がある、②新たな仮説を生みだす上で効果的な手段をもつ、③因果関係のメカニズムを解明するための価値をもつ、④因果複雑性に対処する能力をもつと述べる。このような利点をもつ事例研究法は、数値的に測定不可能な変数を対象とするソーシャルワーク研究において適していると考えられる。

他方、ソーシャルワーク研究において事例研究を支持する岩間（2004：36）は、ソーシャルワークにおける方法としての事例研究には、「実践のための事例研究」と「研究のための事例研究」の2方向があることを指摘する。この2つの事例研究は、個別事例に対する援助の方向性や方法を導き出すもの（実践のための研究）と一般的な法則を導き出すもの（研究のための事例研究）という特性をもち、「理論」と「実践」の循環が相互の「質」を高めていくと述べる。つまり、事例研究には、実践から理論を生み、理論の精緻化を実践で図るという相互連関の仕組みが包含されており、ソーシャルワーク実践の科学化を支える重要な研究方法の一つといえる。しかし、事例研究は、得られたデータそのものが実践家や研究者個人の再構成された記憶に拠るとこ

ろが多く、事実性にも限界があるといわれている (Gilgun1994、Flick=2003、Denzinら=2008、Stake=2012)。さらに、事例ごとに見出せる特異性は、めったに科学的理論の構成要素とはならず、事例の固有性に価値がないといわれることもある (Stake=2012: 106)。このような課題に対して、事例研究法はどのように応えるのであろうか。次に事例研究の方法からこの点を検討したい。

3 - 2. 事例研究の方法

事例研究の関心は、終始一貫して個別の事例に注がれる場合と、ある特殊な事例に向けられる場合がある。Stake (=2012) は、こうした関心が向けられる事例研究を2つに区別し、前者を個性探究的な事例研究とし、後者を手段的な事例研究と呼んでいる。同じ観点から、Gilgun (1994: 372) は、個性記述的アプローチと法則定位的アプローチの2つ方法があると述べている。

個性探究的な事例研究 (あるいは個性記述的アプローチ) とは、ある事例の固有性に関心があり、抽象的な概念やその意味の理解ではなく、徹頭徹尾、事例の中で動いている物語を研究すると説明される。他方、集団的な事例研究 (あるいは法則定位的アプローチ) とは、普遍的な法則の樹立を目指した研究であり、この場合の事例研究は、ある関心事の理解を促進したり、補足したりするものであるといわれる (Stake=2012: 103)。加えて、Stake (=2012: 104) は、個々の事例を探索することを通して、より大きな集合体の理解や理論化を導き一般化する集合的な事例研究があると述べる。このような事例研究の方法は、一つずつを厳密に区別することは難しいが研究目的をどのような方法で果たそうとするかによって十分な検討の上で方法を選択する必要があるといえる。

また、事例研究においてその結果を評価する方法は重要である。事例の報告と解釈の両方が十分に構造化されていなければならない。Stakeは、事例報告の妥当性に無頓着な研究者を批判し、誤った解釈の可能性を少なくするためにトライアングレーションを実行することを強調する。異なる研究者によるデータ収集と一定の手続きに基づく解釈は、観察や解釈の再現性を証明する手段となり、解釈の根拠を提示するのに有効であるといえる。Alexanderら (=2013: 55 - 62) は、このような厳密な手続きにより実行されることで、事例研究の成果は、政策や制度の立案に貢献できると述べている。

3 - 3. 事例研究のデザイン

Royse (2001: 263) は、事例研究の一般的なステップとして、①事例を選択する、②事例のなかで焦点化する問題と論点を決定する、③データ収集の方法を選択する、④データを収集する、⑤データを解釈・説明し、分析する、⑥報告書を書くことの6つに整理している。また、Stake (=2012: 117) は、研究者の取り組む課題として、①研究対象を把握すること、②現象、テーマ、論点 (研究上の問い) を明確化し、選択すること、③データのパターンを探求すること、④解釈の根拠を明らかにすること、⑤オルタナティブな解釈を見だし追及すること、⑥事例についての主張や一般可能性を追求することの6点を挙げている。

研究デザインの初期段階では、事例を選択することから始まる。事例の選択は、「明確に定義された研究の目的を達成するために優れた研究戦略の核心部分になる」 (Georg ら= 2005: 96) ことから、事例選択では、研究目的に対する妥当性が最優先されなければならない。また、Royse (2001) は、そのケースが調査者として深く熟考し、挑戦できるほどに力のある真実を得られるデータであることが重要であることから、事例選択は、最初の関門であると述べている。

これは、調査対象の選定にあたってその事例の「質」を問うことの重要性を指しており、妥当性や信頼性の側面からも、綿密なりサーチ戦略が必要だといえる。

次のステップは、各事例について問うべき一般的質問を明確化することで必要なデータを特定することである。この作業は、データの確実性にとって重要であるといえる。明確な問いの設定は、「各事例から比較可能なデータの抽出や他の研究のデータとの比較を可能にし、得られたデータを標準化するのに役立つ」（Yin=2011：99）ものとなる。言うまでもなく、この作業は、データ収集の方法を決定することに大きく関連する。そのため、データ収集の方法がもつ特性について理解する必要がある。しかし、いくら質の高いデータが得られたとしても、データの解釈が薄ければ事例研究は、何の意味もなさない。

実践学としてのソーシャルワーク研究における解釈とは、援助の視点からの深い洞察と意味づけに他ならない。岩間（2010：187-9）は、ソーシャルワーク理論は実践への指向を包含した体系である限り、援助の視点を抜きにしては存立しえないとし、事例研究において解釈そのものが援助方針の明確化を導きだすものでなければならないと述べる。そして、解釈のプロセスを「情報・データの統合化、問題・課題の構造化、実践への方向づけ」（2010：190-2）という3つの段階で提示している。加えて、岩間（2010）は、解釈のプロセスにおける「価値」の視点を強調する。それは、実践と研究がともに社会福祉の価値の上に立脚しているからに他ならないからであり、データの解釈・分析の段階では、人びとの存在の意味、問題の意味、実践の意味が人間の尊厳や社会正義の価値や理論を反映しているかを問いなおすことが重要となる。このことから、「価値」と「実践」と「研究」を結ぶ方法としての事例研究の役割は大きいといえよう。

他方、ソーシャルワーク研究が実践に寄与できる成果を出すために、最終的な分析を最も質の高いものにしなければならない。Yin（=2011：164-5）は、事例研究の結果の「質」を保証するために4つの原則を示す。1つ目は、分析はそれがすべての関連する証拠に依拠していることを示すことである。とりわけ、分析結果を裏付ける証拠をできる限り指し示す必要性を強調する。2つ目は、分析において発見されたすべてのものを示し、その結果の意味や今後の取り扱いについて十分に説明することが必要であるという。これは、調査に有利になる結果のみを取り扱う危険性を促すものである。3つ目は、分析はその事例の最も重要な側面に取り組むべきであるとし、その際、分析者は最大の努力をもって着手する必要があると述べている。これは、研究者の研究に向かう倫理的な姿勢の重要性を示すものである。4つ目は、事例研究に自身の先駆的な専門知識を持ち込むべきとする。これは、自身の過去の研究結果から得られた知見や、先行研究からの知見を盛り込むことで説得力のある説明を可能にするということである。つまり、より信憑性のある結果として説明可能にするためには、欠くことのできない作業であるといえる。

Yin（=2011）は、研究の成功は、研究者の研究スキルにかかっていると述べている。事例研究は、データ収集の手続きが定式化されているとは言えず、理論的課題とデータとの間が絶えず相互作用する変化の局面にあるため、質の高い事例研究を実施するためには、十分に訓練を受け経験を積んだ研究者が必要だという。そして、一般に必要とされるスキルについて整理している。要約すると①事例研究方法についての知識を備えていること、②聴き手として中庸的立場を維持すること、③研究に対して適応性と柔軟性をもつこと、④事例に対して誠実かつ倫理的であることの4点をあげている。特に、「事例」には、多くの個別の事情、プライバシーが含まれている。研究倫理は、研究における手続きのみならず、研究者の良心、研究の利害関係者および研究者コミュニティのために強く求められている（Stake=2012：117）。たとえ、研究のデザインやプロセスの厳密性を担保し、結果の根拠を示しても、倫理的問題を棚上げにすることはできない。研究者は、適切な行動規範や厳格な倫理コードを遵守し、透明性の確保に努めなければなら

ないといえる。

4. 実践科学研究としての事例研究法の意義

中村は、実践を「各人が身を以てする決断と選択をとおして、隠された現実の諸相を引き出すこと」（1992：70）とし、理論は、現実からの挑戦を受けて鍛えられ、飛躍すると述べる。とりわけ実践学であるソーシャルワーク研究においては、事例の集積の中から法則性や新たな理論の構築に取り組んでいくことが必要になる。つまり、ソーシャルワーク研究における事例研究法は、事象の解明に留まらず、実践モデル生成の可能性を指向するものでなければならないといえる。岡本（2010：14）は、福祉の現場ないし臨床には、先行研究や文献などには記載されていない数多くの貴重で価値のある知見や所見が多く存在するとし、事例の集積・分析は、ソーシャルワークの進化を助けると述べる。また、岩間、は、ソーシャルワークの『理論』と『実践』を結び、両者を地続きのものにする手法として事例研究を重視し、「問題解決学としてのソーシャルワークにおいて『研究のための事例研究』は、『実践のための事例研究』と一体となり始めて意義がある」（2007：736）と述べている。それは、ソーシャルワーク研究が実践のための研究である限り、研究成果は、理論として実践に還元され豊かな実践を導かねばならないし、反面、理論を鍛えるだけの実践が展開されていなければならないことを意味する。

藤井（2004：32）は、実践家が客観的な根拠もなくただ伝統や経験を根拠にサービスが提供されることを批判し、岩間と同様に「実践」と「理論」の乖離を問題視する。つまり、「実践」の質を高めることと「理論」の質を高めることは同じなのである。その意味で、「理論」と「実践」を橋渡しする事例研究は重要な意味をもつ。

一方、事例研究は、ソーシャルワークの実践の科学化にも大きな意義をもつ。岡本は、ソーシャルワーク研究における事例研究は、「医学における症例研究などに比べて、その深化の度合や成果の保持、継承、発展などにおいて大幅に立ち遅れており、個別的な体験として埋没し、相互に共有できるような論理化に至っていない」（2010：31）と述べている。さらに、ソーシャルワークが既存の諸科学からの演繹的な科学の仕方や応用科学のあり方からの克服を図るために、事例を丁寧かつ地道に積み重ねていくことが不可欠であるという。また、古川は、岡村と同様に分析や把握のしかた、設計において独自の視点や枠組み、言語体系を内側から内在的に構築することに十分なエネルギーを傾注してこなかったと社会福祉研究のあり方を批判し、今後の研究のあり方について、「基本的には社会的現実（実態）から出発する研究が求められている」（2004：11）と述べている。

以上のことから、今後、刻々と変化する社会の中で、人間の営みに生起する複雑な現象を丁寧に読み解き、個別の知から共通の知へと精緻化していくような研究はますます重要となってくる。その最も一般的な方法といえる事例研究法は、実践科学研究として期待させるところである。

注

- (1) 『ソーシャルワーク研究』では、2004年Vol.29No.4「ソーシャルワーク研究方法」、2008年Vol.34No.1「エビデンス・ペースト・ソーシャルワーク」、2009年Vol.35No.2「ソーシャルワークの研究手法」、2010年Vol.35No.4「ソーシャルワーク・リサーチの技法」などにより、量的研究、質的研究、演繹的研究法、帰納的研究法、アプローチや調査技法などに関する特集が幾度も組まれている。

- (2) 渡部 (2010) 「第2章 ソーシャルワークの研究方法－ソーシャルワーク研究の発展に向けて」『ソーシャルワークの研究方法－実践の科学化と理論化を目指して』相川書房、15 - 35.において、フレデリック・リーマの文献を引用しながらソーシャルワーク研究がたどってきた歴史について説明しているので参照されたい。
- (3) 小田によれば、「分厚い記述」あるいは「濃密な記述」と呼ばれるものは、哲学者ギルバート・ライルが用いた表現を人類学者クリフォード・ギアーツが人類学的解釈の特徴を示す術語として特殊化したものである。その意味は、ある事象や行為に関する記述に含まれる多様で複雑な意味の連関を十分に綿密に解釈し得ているかということであり、量的なことではない。

文献

- Baker, R. L. (1999) The Social Work Dictionary 4nd Ed., NASW Press.
- Pope, C., Mays, N, Popay, J. (2006) Synthesizing Qualitative and Qualitative Health Evidence : A Guide to Methods. (=2009,伊東景一・北素子監訳『質的研究と量的研究のエビデンスの統合－ヘルスケアにおける研究・実践・政策への活用』医学書院。)
- Marlow, C. R. (2011) Research Methods for Generalist Social Work. Brooks/Cole 1 - 16.
- Royse, D. (2001) Research Method in Social Work 6nd. Ed., Brook/Cole, 260 - 281.
- Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (2000) Handbook of Qualitative Research, 2nd Ed., Sage Publications. (=2008,平山満義監訳、岡野一郎・古賀正義編訳『質的研究ハンドブック1巻－質的研究のパラダイムと眺望 第3版』北大路書房。)
- Donald, A. S. (1983) The Reflective Practitioner : How Professional Think in Action. Basic Books New York. (=2001,佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版。)
- 藤井美和 (2004) 「ヒューマンサービス領域におけるソーシャルワーク研究法」『ソーシャルワーク研究』29(4),278 - 285。
- Flick, U. (1995) Qualitative Forschung, Reinbek bei Hamburg. (=2003,小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論 第5版』春秋社。)
- Alexander L, G., Bennett, A. (2005) Case studies and Theory Development in The Social science., The MIT Press. (=2013,泉川泰博訳『社会科学のためのケーススタディ－理論形成のための定性的手法』総計書房。)
- Gilgun, J. F. (1994) A Case for Case Studies in Social Work Research, Social Work 39(4),371 - 380。
- 広瀬和佳子, 尾関史, 鄭京姫, 市嶋典子 (2010) 「実践研究をどう記述するか－私たちの見たいものと方法の関係」『早稲田日本語教育学』第7号、43 - 68。
- 池埜聡 (2010) 「第9章 ソーシャルワーク研究における質的・量的ミックス法」『ソーシャルワークの研究方法－実践の科学化と理論化を目指して』相川書房、143 - 166。
- 稲葉光行、抱井尚子 (2011) 「質的データ分析におけるグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチの提案」『政策科学』18(3),255 - 276。
- 岩間伸之 (2004) 「ソーシャルワークにおける事例研究法－「価値」と「実践」を結ぶ方法」『ソーシャルワーク研究』29(4),286 - 291。
- 岩間伸之 (2007) 「事例研究の意義」古川孝順, 岡本民夫, 宮田和明, 濱野一郎編者『エンサ

- イクロベディア社会福祉学』中央法規出版、736 - 741。
- 岩間伸之 (2010) 「第 1 1 章 ソーシャルワーク研究における結果の解釈とその方法」『ソーシャルワークの研究手法－実践の科学化と理論化を目指して』相川書房、187 - 199。
- 木原活信 (2002) 「社会構成主義によるソーシャルワーク研究方法－ナラティブ・モデルによるクライアントの現実の解釈」『ソーシャルワーク研究』27(4), 28 - 34。
- 三毛美予子 (2009) 「社会福祉実践を支える事例研究の方法」『鉄道弘済会』104, 76 - 87。
- 松岡敦子 (2006) 「ナラティブ・アプローチと複雑な現実に対応するソーシャルワーカー」『ソーシャルワーク研究』32(1), 5 - 19。
- 松原 弘子 (2011) 「質的研究における客観性に関する論考--GTA法と写真表現との比較を素材に」大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報(8), 23 - 30, 2011.
- 中村雄二郎 (1992) 『臨床の知とは何か』岩波新書。
- 野口裕二 (1995) 「構成主義アプローチ－ポストモダン・ソーシャルワークの可能性」『ソーシャルワーク研究』21(3), 180 - 186。
- 岡本民夫、平塚良子編『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房。
- Robinson, V. P. (1934) *A Changing Psychology in Social Case Work*, The University of North Carolina press. (=1969、杉本照子訳『ケースワークの心理学の変遷』岩崎学術出版社。)
- Stake, R. E. (2000) *A Case Study*: Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (2000) *Handbook of Qualitative Research*, 2nd Ed., Sage Publications. (=2012、平山満義監訳、藤原顕編訳『質的研究ハンドブック 2巻－質的研究の設計と戦略 第4版』北大路書房、101 - 128。)
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析入門』新曜社。
- 佐藤豊道 (2002) 「口述の生活史研究法」『ソーシャルワーク研究』27(4), 35 - 40。
- 下山晴彦・丹野義彦 (2001) 『講座臨床心理学〈2〉臨床心理学研究』事例研究東京大学出版会、61-81。
- 瀬島克之 (2005) 「質的研究に問われるもの－科学的研究としての背景と課題」『保健の科学』47(5), 353 - 360。
- Weitzman, E. A. (2000) *Software and Qualitative Research*, Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (2000) *Handbook of Qualitative Research*, 2nd Ed., Sage Publications. (=2008、平山満義監訳、大谷尚・伊藤勇編訳『質的研究ハンドブック 3巻－「ソフトウェアと質的研究『質的研究資料の収集と解釈 第3版』』北大路書房、191 - 210。)
- 和気順子 (2010) 「第 6 章 ソーシャルワークの演繹的研究方法」『ソーシャルワークの研究手法－実践の科学化と理論化を目指して』相川書房、89 - 105。
- Yin, R. K. (1994) *Case Study Research*, 2nd Ed., Sage Publications. (=2011、近藤公彦訳『新装版 ケース・スタディの方法』千倉書房。)
- やまだようこ (2008) 『質的心理学の方法－語りをさく』新曜社。